

# poco a poco

パラグアイ便り 2024/05/01 Número15

2022年度 青年海外協力隊

氏名：吉田 花純

職種：小学校教育

## 【少しずつ変わってきた意識】

パラグアイ人のゴミに対する意識の低さは、知り合ったパラグアイ人の誰に聞いても“私たちの悪い文化だ”と認めるほどです。歩いていても車やバスの中からも、大人も子どもも関係なく“ポイ捨て”をする習慣が根付いています。その習慣が適用されるのは、学校も例外ではありません。教室や校庭は、飲み終わったペットボトルや、食べたお菓子のゴミなどで溢れかえります。それを保護者が雇っている清掃員が片付けます。昔は“掃除の時間”があったようですが、現在では保護者が子どもたちに清掃させることを望まなくなったそうです。私個人としては、貴重な費用は子ども達の学習環境を少しでも改善することに充て、子どもたち自身が清掃をすることを通して多くのことを学んでもらいたいと思っています。早い話、子どもたち自身が掃除するようになれば、自ら汚すような行為はしなくなることでしょう。また、保護者も含めたイベントが開催された後には、“ここは誰が何をするための場所なの？”と泣きたくなくなるくらい、足の踏み場が無いほどのゴミで溢れかえります。ただ、ポイ捨てをする・せざるを得ない背景には、国民の意識改革だけではどうすることもできない要因がたくさんあります。

それについて理解した上で、“ゴミ問題”に関しては、何度も同僚と議論を重ねてきました。“環境を清潔に保つことの重要性”についての理解は得られるものの、習慣が根付いてしまっている以上、なかなかそれを変えることは大人でも難しいようです。長年の習慣を変えることがどれだけ難しいかを理解することはできますが、ゴミだらけの環境で子どもたちが安心して勉強に集中できるとはどうしても思えません。

どうしても諦めたくなかった私は、例えただの自己満足であるとしても、自分一人だけでもできることを昨年度から地道に積み重ねてきました。チャンスを伺って、同僚や保護者、子どもたちを巻き込んで環境教育を行い、ゴミをゴミ箱に捨てざるを得ないような環境作りを整えてきました。「こんなことしたって、どうせ無駄だろうなあ」と、半分諦めながら。すると最近気が付いたことですが、校庭に落ちるゴミの量が来た当初に比べて圧倒的に減っているのです。イベントでは「ゴミをゴミ袋に捨ててください。」と、私が設置した袋にゴミを入れるよう呼びかける放送が流れるようになり、「今日はみんな、ゴミをちゃんと捨ててくれるといいね。」と声をかけてくれる同僚が増えました。「今度はいつ、教室が綺麗が見に来てくれるの？」「僕ね、掃除が好きだよ！」と話しに来る子どもが増えたことも、衝撃的でした。

“少しでも何かが良いな”という、そのモチベーションだけで日々活動をしています。ただ、“何かを変えること”の難しさを痛感してきたからこそ、誰にも何にも期待せずに行えることを見つけては淡々と活動をしています。そんな日々の中で、自分の活動に効果があったと感じられるときの達成感や成成感はやみつきになります。思わずニヤツとしてしまうような、心の中でガッツポーズをするかのような、そんな嬉しくてたまらない感覚です。

無駄なことは1つも無いと信じて希望は捨てず、でも期待はせず、これからも粘り強く活動に取り組んでいこうと思います。



ビンゴ大会の様子

ビンゴ大会では  
多くの人が集まります。  
以前は終了時に大量のゴミが  
床一面に落ちていましたが  
これほどにまで少なくなりました。



ビンゴ大会終了時の様子



### 【家族と過ごしたセマナサンタ】

パラグアイでは、90%近くがキリスト教（カトリック）信者であると言われています。その宗教に関わる行事の中でも、最も盛大に行われるセマナサンタ（復活祭／聖週間）を家族と過ごしました。私の住んでいる地域ではその期間毎日、市役所主催のイベントが行われました。キリスト教の始祖であるヘルス（スペイン語でイエス・キリストを指す）の降誕に関する劇、教会でのミサやコンサート、チバと呼ばれる伝統的な食べ物を作って食べる事、巡礼として丘に登ること、先住民族の伝統舞踊などが行われました。多くのイベントに参加した他、7つの教会巡りなどにも挑戦しました。中でも印象に残っているのは、apepu（グアラニー語でオレンジの種類の一つを表す）で作られたキャンドルが大量に並べられた道を、美しいアート作品（キャンドル）を持って、歌いながら練り歩くセレモニーが幻想的でした。



### 【ひとこと】

3月4月と多くの別れを経験しました。特にとてもお世話になっていた先輩隊員や任期が短い同期の帰国はとても寂しく感じました。もちろん普段はパラグアイ人に囲まれ生活をしているわけですが、公務として一斉に隊員が集まる機会や休日にプライベートで会ったり、電話やメッセージのやり取りを通して活動の相談をしたりするなど、経験や思いを共有できる同志の存在に対する心強さと感謝の気持ちは計り知れません。職種や年齢、生活環境は違っても、上手くいかないことの方が圧倒的に多い中で、希望を捨てずに毎日あれこれと試行錯誤している点では共通しており、顔を合わせると話が尽きません。本音をさらけ出せる存在というのは非常に大きいです。そんな同志が一人帰国する度に、寂しさや不安を感じます。ただ不思議なことに、自分も早く帰国したいとは思ったことはありません。ふとしたときにここでの生活が心地よいと感じることも増えたからです。また新たな知識や経験、人との出会いが、私の好奇心を強烈に刺激して、考え方や将来の選択肢の幅が飛躍的に広がっています。そういったあらゆる可能性への期待に胸を膨らませることができている毎日が、たまらなく面白いと感じています。以前まで“30歳までに〇〇をしたい”など、年齢に縛られて将来のプランを考えることもありましたが、数々の素敵な出会いに影響を受け、“年齢なんて関係ない。やりたいと思うことが見つければ、その瞬間から始めれば良い。何にも縛られず、自由をとことん楽しもう。”と、今はそう思っています。自分の心と体を大事にすること、住んでいる場所を問わず応援し続けてくれている人々への感謝の気持ち、その2つだけは決して忘れることなく、引き続き活動に励んでいこうと思います。